

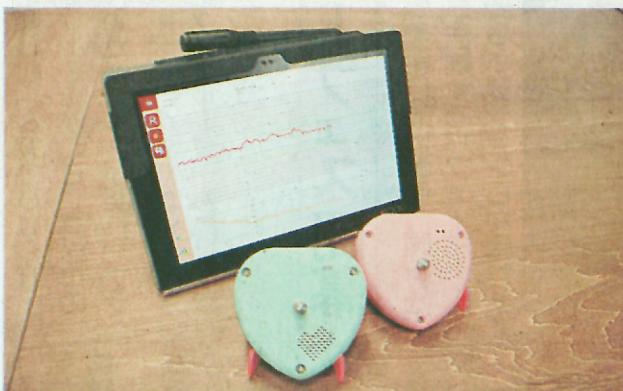
妊婦と胎児の遠隔診療システム「メロディー」を開発するメロディ・インターナショナル（高松市）。産婦人科医の不足が深刻化する中、遠隔医療の推進によって、妊婦の安心、安全な出産の実現を目指す。尾形優子CEOに商品開発に至った経緯や機器に入められた思いなどを聞いた。

# メロディ・インターナショナル (高松市)



## 妊娠の遠隔医療機器開発

2つの機器とタブレットによって、遠隔医療の推進を可能にする「メロディ i」



■メモ 「メロディ i」は、専用の機器で胎児の心拍数と妊婦の子宮収縮の具合を測り、測定結果をサーバーに送信することで遠隔地の医師による遠隔診療を可能にするシステム。医療機関が持つ分べん監視装置と同じ機能を持ちながら、小型、軽量化を実現。多言語にも対応している。

を測り、計測結果をサーバーに送ることで、遠隔地にいる医師がスマートフォンでデータを見られる仕組み。病院にある分べん監視装置と同じ機能を持つ。妊婦自身で簡単に測定できるので、自宅にいながら医師の診断を受け、的確なアドバイスをもらうことができる。それによって、精神的な不安も尋うひる。

医師不足といつても、日本は周産期医療の技術に優れており、妊娠、赤ちゃんの死亡率は世界トップクラスの低さ。一方、発展途上国になると、死亡率は日本の100～400倍に上る。

現在、実用化されているのはタイの4病院のみだが、今後、システムが普及していくば、安全に出産できる妊婦は増える。「世界中の妊婦と赤ちゃんが笑顔でいられる」。それを叶えるのが夢だ。